

ほたる

まあ聞給え六月のたしか三日だつけ去年のことだ。夕方から用事があつて牛込の中里町まで出懸けてね、用を足して歸ると、丁度ね、其晩は雨模様で、むかふを出しなにぱらぱらと來たから、傘を借りたが、もうほんの通雨で、でもまた何時降出かも知れないからとひろげたまんま、矢來を通ると、「ちよいともしもし」。と優しい聲で呼留めた者がある、それ、それだから僕が嫌だといふんだ、すぐそれだ、何も優しい聲で呼んだからたつて直ちにこれを怪しいといふことあない、そりや勿論何だ、君よりも僕の方が其時は怪しいと思つたからね、可か、そこで、「は、私かね」。と謂つて振返つて、と見ると妙齡のお嬢様。何うだい怪しかろう、中形のあらい奴でかう少しく意氣造さ、謂ふまでもなく島田だよ、然も一面の識も無しと來て居

る、僕こゝに於てか其少しなにさ、え、いやに、
氣をまはすことあない、矢張怪しかつたばかり
だあな。一体後背からおういおういと時代で來
るのは、松並木か、山路と極つて居るがこれは
「ちよいと貴下」で世話に出來てゝ、娘は杉垣
の中に居た。露次と見えるね、椽側にやずらり
と其簾を下ろして十疊ばかり一面の油團の濡れ
たようなのが奥床しい。前へまわると冠木門が
あらうかといふ書割だ。曇つてるから薄暗いの
に、件の座敷から燈明のさすのが翠の滴るやう
な、植込を潜つて來て娘の白いのを、ぼかした
やうに見せる。ね、十二時過だといつ薩張氣
がないがまだ宵の口だから、僕ぐつと腹を据た、
君だつて左様だらう扇をあげて招かれる、三反
ばかり乗出したのが駒の頭を立直してざんぶざ
んぶと引返すのが、日本人だといふからね、僕
の引返したのも不思議ぢやあるまい。さて、「何
ぞ用かい」。と尋ねると、少し口籠つてね、「ど

うもあの、お足を留めまして、誠に濟みませんが、あのウ此兒があなた」と言懸けて、下を向いて、「ほんとに仕やうがないねえ」といつたのは其處にもう一人六つばかり小兒が居たので。

兄弟と見えたよ、それからまた僕に、「何しても肯きません、仕様がないんですわ、あの螢が欲しいつて」。「え、螢が」。「それ、お傘に」。なるほど、一疋、傘の裏にとまつて居る。今の雨で驚いて、窮虫傘に入つたる奴、これいきにいふと傘に峙かりたよとか何とかいふのだ、そこは、君のお眼がねでどちらでもして置くさ。

僕もいはれて氣がついたんだから、「おやほんにな、坊ちゃんあげませう」と取つて遣ると、本人より姉様が大喜で、「可愛いのね、貴下、新ちゃん、お禮をおいゝよ、何も難有う存じました」。何」といつたきりずういと歸

る。トたゞこれだけのお話しさ、生憎僕がいそがしかつたもんだからちつとも小説にやあならなかつたので、それつきり。

今年の四月、日は忘れたが、夕方から朋友を誘つてね、今の家から散歩に出懸けるて傳通院をぶらついて、切支丹坂を下りて竹早町から江戸川へ出て、石切橋を渡つて神樂坂へ行かうかと思つたが何うまちがへたかつひそれた。氣が着く妙な處さ、兩側が杉垣で路巾が甚だ狭ひならむぢやあ歩行れない位、それで以て暗いと來て居る、この位弱つたことあイヤ恐らくあるまい、町の名が薩張知れなくつて何處だか解らず、段々木立が深うなつてますます暗くなる、行つても行つても見當が着かないので、まあまあとにかくも日本のうちにやあ違いないがと、くだらないことも眞面目に謂う、時間も大分経つたらう、固より人ツ子一人にも逢はないしさ、頗る心細くなつた處へ、うをうーと牛の聲が聞

こえたので僕あもう飛上つたね、何だつてく
やみに牛とそれ譬にもいうぢやあないか。譬へ
違つた處で犬だ。犬だつて不景氣さね、何の君
鳴かずとももの事ぢやあゝるまいか、ほんとにさ
吃驚して驚いて、ばたばたと駈出したね。やう
立留まつて、ほつといふ呼吸をつくつと、あゝ！
天祐！だ。あかりが見える。

「もしもし此處は一体こりや何處でございま
せう」。と聞いたから可ぢやあないか。「臺町
ですよ、何處へ行らつしやいます」。と婦人の
聲、ソレまたか。婦人の聲というつと直ぐ耳を立
て、悪るい癖だ。

「えゝ、小石川へ行くんですが」。「はい、
小石川の何處へ行らつしやるの」。「植物園の
方へ」。「ぢやあね、これを左へ眞直においで
なすつて」。と腰障子をあけて顔を出して、あ
たりを見て「おゝ、眞闇なこと、これぢやあ知
れ憎うございませう。ちよいとお待遊ばせ、あ

のう、何を、失禮ですが提灯を差し上げませう」。
「いゝえ、何、其にやあ及びません」。「御遠慮遊ばすな。何のしどいんですが」。と影法師がすうとすはつて、しばらくして出て来てね、「ぢやあ、これを」。とくれた。僕が感謝して受取る時、おい、顔を見ると見違えるほどだつたよ。

（「泉鏡花全集 別巻」岩波書店より）